

CAG-GFP（緑色蛍光タンパク）は、全ての遺伝子導入細胞とその子孫の細胞を標識する、(2) PB-Gfp-Cre/PB-CAG-loxPstop-loxP-KOKO（Kusabira-Orange 蛍光タンパク）は、GFAP を発現した細胞とその子孫の細胞を標識する。遺伝子導入後、生後 6 日目に脳をサンプリングし、免疫組織化学により標識細胞の性質を調べた。その結果、KOKO で標識された細胞（GFAP 発現細胞由来細胞）に、顆粒細胞マーカーである Prox1 の発現が確認された。このことから胎生期に VZ で産生され、一時的にアストロサイトマーカーの GFAP を発現した神経前駆細胞が、生後に顆粒細胞へ分化することが明らかになった。以上の結果から、成体になってもニューロン新生を続ける顆粒細胞は、成体期だけでなく、胎生期でも神経幹細胞・神経前駆細胞の性質が、他の脳の部位とは異なることが明らかになった。

1-6.

大学キャンパス周辺の地域住民の保健・医療・福祉に関するニーズ調査 ～周辺住民へのアンケート調査の結果から～

（医学部看護学科）

○新井 志穂、藤沼小智子、春日 広美
清水 典子

【背景】平成 28 年度に大学周辺の住民を対象にフォーカスグループインタビューを行い、世代、性別、立場により、保健・医療・福祉へのニーズに違いが認められた。本研究では大学周辺の住民の保健・医療・福祉に関するニーズを調査し、本学科が住民に貢献できる活動を考察することを目的とする。

【研究方法】大学周辺に居住し、20 歳以上の日本語の調査票を読解、回答できる者を対象とした。自記式調査票にて留め置きまたは対象者へ直接配布し、郵送により回収した。調査内容は、属性、居住地域に対する認識等であった。記述統計分析を行い 40 代以下と 50 代以上の 2 群間を比較し、自由記述には Nvivo を用いた。倫理的配慮は調査票に記載し、同意を得た場合のみ返送することとした。本研究は東京医科大学医学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：T2018-0025）。

【結果】403 部を配布し、130 名から回答を得た。124 名を分析対象とした。平均年齢は 57.0 歳であっ

た。居住地域に対する認識は「住み心地がよい」「便利な居住環境」「住民間の災害対策がとられていない」が多かった。暮らす中での不安は「介護」「自身や家族の健康」が多く、2 群間の比較は「介護のこと」「相談する人や場所がない」等で有意差が認められた。地域にいるとよい人では「ちょっとした介護の手伝いをしてくれる人」が多く、2 群間の比較は「話し相手」で有意差が認められた。地域にあるとよい催しや場所では「介護の相談」「防災の催し」が多く、2 群間の比較は「介護の相談」に有意差が認められた。自由記述では「住民が参加できる催し物の充実」「地域と大学との共存」等 7 カテゴリーが抽出され、“住民参加の医療講座等を希望する”等のコードが含まれていた。

【考察】50 代以上では介護への要望が強く、災害はどの年代においても共通なニーズであった。今後は、講座や大学の地域貢献活動を住民に知ってもらうための広報活動を工夫する必要がある。

1-7.

卒業時 OSCE の評価の信頼性向上に関する研究 —教員に対する面接調査—

（医学教育学分野、総合診療科、医学教育推進センター）

○原田 芳巳

（医学教育推進センター）

窪田 裕紀

（総合診療科、医学教育推進センター）

平山 陽示

（医学教育学分野、医学教育推進センター）

三苫 博

（医学教育学分野、総合診療科）

大滝 純司

【背景】2020 年度から臨床実習後 OSCE が共用試験として行われる。本学では 2018 年度から臨床推論型課題 6 課題を卒業時 OSCE として実施している。3 課題は大項目ごとに概略評価、3 課題はそれぞれを細目評価している。評価者には専門外を含む多くの教員の参加が必要であるが、専門と専門外の評価者で評価に差がないか、専門外の評価者からはどの点がわかりにくいかわかずにされていない。

【方法】2019 年 7 月に行われた本学の卒業時 OSCE